



書評

[評者]

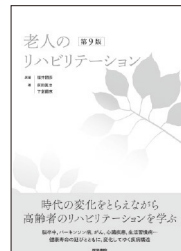
村田 和香

群馬大学教授・作業療法学

老人のリハビリテーション 第9版

福井 圀彦 原著
前田 眞治, 下堂蘭 恵 著

●B5 頁 440 2022 年 2 月
定価: 6,600 円 (本体 6,000 円 + 税 10%)
[ISBN978-4-260-04805-7] 医学書院刊



当たり前のことであるが、人は突然に老人としてこの世に現れるわけではない。生を受け、愛くるしい赤ちゃんが愛され育てられて子どもの時間を過ごし、成長し大人になる。同時に、行動範囲が広がり、活動や社会参加が増えていき、大人として社会生活の営みをもつ。成熟した時間を過ごし、「老い」とともに自分らしさや幸せ、生きる意味を追究していく。そんなあるとき、病気となり、障害をもち、老いた対象者としてリハビリテーション・スタッフの前に現れる。

私たちには、今、目の前にいる対象者の姿しかわからないが、人の生きてきた時間の長さや空間の広がりだけでなく、その時代の出来事をも受け止めていくことは、リハビリテーションにとって大切なことと感じている。本書第9版の序にあるように、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、私たちの生活は変化した。高齢者や障害者も大きな影響を受け、決して以前と同じ生活には戻らないかもしれない。

人生の節目は確かにあるが、一連の流れのなかで人やその生活、「老い」を捉えなければ、支えることはできない。それでも、やはり老人のリハビリテーションの特殊性がある。それを学ぶうえで、本書には版を重ねてきた強さがある。

「老い」を体験している人のリハビリテーションを、「老い」を具体的に生活のなかで体験していない者が治療者となり考え、実践する。障害に老いと病気が加わる大変さ、壮絶さについて若い学生が学んでいくのは、考えてみるとかなり難しく、本質を理解す

るのは無理な話かもしれない。そんなときには、本書の「Ⅱ 老人の尊厳とその接し方」が参考になる。この章では、人に対する姿勢が示されている。人間の尊厳は、すべての人に共通するものではあるが、老人であるがゆえの多様性を捉える接し方が具体的に書かれている。

人生をまとめる意味をまだ考えたことのない若いスタッフが、リハビリテーションを担当することだってある。けれど、それは決して悪い面だけではない。治療者側が自覚したうえでのことではあるが、若さは十分武器になる。高齢になったからこそ果たすことのできる社会での役割もある。それには、若者と接する機会が、たとえ医療の場面であっても重要だと感じる。そのため、その役割がどんな意味をもつのか、治療にあたる若者は知っておかなければならない。高齢化が一層進む社会のなかでは、この両者の経験は一層大切ではないだろうか。

今回の版で加わった「Ⅲ 終末期のリハビリテーション」は、今後ますます発展していくであろう。特に「右肩下がりの終末期のリハビリテーションを考える」の項は、明るく前向きなリハビリテーションと少々違う意味付けが加わる。「老い」もそうであるが、死と向かい合うことの意味を、リハビリテーションのなかはどうおくべきかが興味深い。また終末期の問題は、老人のみならず家族の問題でもあり、社会の問題でもある。リハビリテーションに携わる者として、ここに大きく貢献できると信じている。